

「権力・領土・所有の起源」を、マルクスとルカーチに依拠し理論的に解き明かす

「近代の終焉」を告げる社会的出来事を深く思索

尾内達也

石塚省二 著

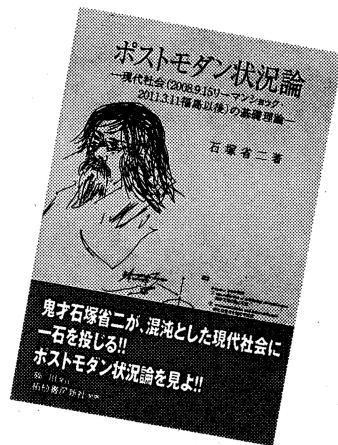
▶ポストモダン状況論

現代社会(2008.9.15リーマンショック・

2011.3.11福島以後)の基礎理論

4・26刊 四六判232頁 本体2000円

発行：磯川／発売：拓植書房新社



本書は、「近代の原、ロゴス批判」全12巻として構想された作品群の7冊目、最新刊にあたる。著者は、惜しくもこの5月に急逝された。享年64。本書では、著者積年の問題意識、「権力・領土・所有の起源」を、マルクスとルカーチに依拠し理論的に解き明かしている。権力・領土・所有といった近代の概念の無根拠性、言いかえれば、その非合理性を説得的に展開しているのである。この点がまず、注目されなければならない。本書は大きな哲学的問題意識の文脈で言えば、シリーズ名の「近代の原、ロゴス批判」に見られるように、問題意識はルカーチやハイデッカー、デリ

ダ、ドゥルーズ、フーコーなど、同一の方向性を持つている。近代社会をその根底にある原理(一言でいえば、キリスト教の唯一神)まで遡って批判しようという試みである。多くの場合、日本の哲学者と言われる人々が、「客体化され事物化された精神的能力の販売者である専門的な『大家』(G・ルカーチ「歴史と階級意識」)となり、「社会的出来事」に対してはただ傍観者となる(『同書』)のに対して、著者はまったく好対照の仕事をしてきた。ルカーチの研究を中心にして、近代社会が合理性を掲げて、周辺に逐いやつてきた「感情」を、倫理・道徳の根拠とする「感情の普遍化テーゼ」や「社会的距離化テーゼ」などの理論的展開を、まさに時代の社会的出来事と格闘しながら深めてきたのである。その意味で、著者の哲学は常に実践哲学であったし、実践社会学であった。本書でも、福島原発事故、リーマンショック、68年パリ五月革命、現存社会主義の崩壊といった「近代の終焉」を告げる社会的出来事を深く思索している。その理論的な枠組みは、本書のタイト

ルにもなっている「ポストモダン状況論」と言われるものである。これは、「モダン状況」(近代への求心力が働いている状況)と「ポストモダン状況」(近代からの遠心力が働いている状況)の二つの状況を射程に収めながら、「高度情報化」と「高度消費化」がもたらした「日常的ポストモダン状況」、世界的学生反乱が引き金になった「知的ポストモダン状況」、現存社会主義の崩壊によって起きた「国際関係のポストモダン状況」を具体的に展開するものである。さらに、「モダン状況」にも「ポストモダン状況」にも定位せず、両状況として対象化した世界を「近代の終焉」として捉え直し、そこから、哲学的に三つのカテゴリー「欲望」「他者」「自然」を取りだし、学的に展開するものなのである。

もうひとつの本書の隠れた問題意識——しかし、本質的と言っていい——は、「マスコミ」批判である。「マスコミ」とは何か。ずばり、マスコミのチンドン屋略して「マスコミ」をやっている学者・評論家のみなさんのことである。言ってみれば、ルカーチの言う「操作」に嬉々として加担している人々を指している。これを著者は、金権主義、権威主義と批判し、そもそも欲望産業の代理人が学者を騙る状況が、自分もポストモダン状況論を考えさせたのだと語っている。

日・英・仏・独など、10カ国語を話し、確認されただけでも、日・英・仏・独・ポーランド語・ロシア語で論文を書き、第一線の国際的な社会学者・哲学者と共同研究してきた、才能あふれる著者の知名度が、国内でそう高くないのは、「嫉妬」のなせるわざではないとは言いが切れないだろう。

本書評は、先生「きあと24周年の実施が決まった」ルカーチの存在論「公開講座」を受講生として参加して8年、東京情報大学の公開講座に講師として毎年呼んでいただいていた6年、そこで、まったく自由にしやべらせていただいた先生への追悼文でもある。最後に、追悼句一句をもって、ご冥福を祈りたい。

天開いて音の消える白雨かな
(詩人)

ノンフィクション

武藤類子さん。彼女が つむ

だった消費者もまた加害者で

くれたった私たちの心に、本

政府による公式な被害レポー